



琵琶湖で学習航海 滋賀県立びわ湖フローティングスクール



出港する学習船「うみのこ」

琵琶湖で受け継がれる 2つの「関わる力」

滋賀県立びわ湖フローティングスクールでは「環境に主体的に関わる力」と「人と豊かに関わる力」、この2つの「関わる力」を大切にしている。湖上では琵琶湖の自然に直接触れる「びわ湖学習」が行われる。この活動では児童が主体的に環境に関わるきっかけを作っている。

一方、船内生活では大人数での共同生活を通して、共生・協働する力を培っている。児童は船内という特別な環境の中で、人と豊かに関わる力を育む。

活動開始から約40年間、57万人以上の児童が乗船してきた。フローティングスクール指導主事の寺西さんは「一人ひとりが自分のできることを考えて実践してきた成果が今の琵琶湖だと思う。SDGsを踏まえつつ、より良い取り組みを目指したい」と力強く語った。

船で学ぶ、琵琶湖に学ぶ

県立びわ湖フローティングスクールでは学習船「うみのこ」での学習を通して、琵琶湖の環境に主体的に関わる力を育むことを目的にしている。以前は淀川水域の学校を中心に交流が始まり、現在では、「うみのこ」には滋賀県のすべての5年生が乗船している。乗船中の学習では環境問題のほか、人と豊かに関わる力も身につけることができる。いろいろな学校の生徒との交流の中で、友情を育む機会にもなるのだ。また、学習環境である「うみのこ」にはバイオ燃料（BDF）や太陽光パネルが搭載され、電気推進船として環境にも配慮している。滋賀県をはじめ、全国・世界の子どもたちが、この「うみのこ」に乗船し琵琶湖から様々な学びをしてほしい。

新しい学習の形 1日航海

新型コロナウイルスの影響を受け、これまでの1泊2日の航海から、今年度は1日航海として実施している。船内の対策では、はめ込み式の窓から開閉式の窓に改造するなど換気の強化に成功した。1つの部屋に大人数集まることを避けるなど、濃厚接触にならないように注意して子供たちの動きを工夫し活動を続ける。これまでの航海に比べ、1日航海では学習時間・乗船校同士の交流時間が減少するが、今年度最初の9月1日の航海では、子どもたちから「楽しみにしてた」など好評の声が多数あったという。子供たちの交流は少ないが、プランクトンや魚、湖底生物の観察を通し、学習を進めていくという。



2代目「うみのこ」

取材先

滋賀県立
びわ湖フローティングスクール



学校教育に加え学習船「うみのこ」での学習を通して、健全な青少年の育成のため設立された。滋賀県内外の児童を対象に環境教育を行っている。

取材者

山根崇純

立命館大学4回生

#APU
#インドネシア大学
#東南アジア
#釣り

池田怜央

滋賀大学1回生

#データサイエンス
#野球観戦
#バレーボール